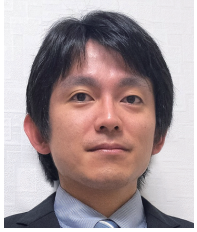
仕事と私事の歩き方



井本裕顕

京都工芸繊維大学分子化学系
[606-0962] 京都市左京区松ヶ崎御所海道町
准教授，博士（工学）.
専門は有機無機ハイブリッド化学.
https://www.cis.kit.ac.jp/~himoto/index.html

仕事も私事も延々と続く一本道ではなく、岐路に立つことがある。自分は何を考えて道を選んだのだろうか。今までの歩みを振り返りながら、この機会に改めて考えてみた。

最初の岐路は学位取得後の進路であった。大学か企業かを悩みに悩んだ末に企業への就職を決めた。大学での研究経験だけでは、なりたい自分にはなれないと思ったことは「グローイングポリマー」にて詳述した（2021年12月号）Si。加えて、アカデミアで教育職に就くうえで、企業に就職していく学生たちを指導するには企業経験が必要だとも考えた。そして、博士号さえあれば自分の研究者キャリアを自由に選べることが強い心の支えになり、企業への就職活動へと歩を進めた。同時期に、プライベートでは結婚を決めていた。結婚生活を送るうえで、企業の新卒社員というのは居住環境も経済力も安定感抜群である。最終的に、1年先に就職していた妻と同じ会社に入社した。

会社員としての日々は楽しく、公私とも順風満帆に思えたが、学問こそが自分の生きがいである気持ちだけは満たされることはなかった。そんなとき、妻が母校・京都工芸繊維大学を訪問した際に指導教員だった中 建介先生が助教を探していることを聞いて、その場で私にメールを送ってきた。「中研の助教って興味ある？」何の迷いもなかった。三重と京都の単身赴任生活になるが、千載一遇のチャンスを掴むために公募戦線に挑んでポジションを得た。

2年ぶりのアカデミアは、中先生と個性的で優秀な学生たちに囲まれて順調に滑り出した。今度こそすべてが満たされると思っていたが、プライベートでは家族との大切な時間を失っていた。週末だけ三重に戻る生活が半年ほど続いた頃、名古屋に住んで新幹線通勤することに決めた。名古屋駅前の賃貸と通勤定期代で給料の大半が飛んでいくが、お金のかかる趣味をもたない私にはさほど気にならなかった。かくして、妻が関西への転職をするまでの2年余りを名古屋で過ごすこととなった。

始発で研究室に向かい終電で帰宅する、という贅沢な日々を送ってきたが、転機が訪れた。第一子が誕生したことで生活が一変した、と書きたいところだが、娘が1歳半の頃に単身で数カ月留学するという暴挙にも妻は寛容だった。本当に生活が変わったのは、2021年の第二子誕生である。さすがに8時～17時という社会人らしい生活にシフトすることになり、0歳児との添い寝生活が始まった。睡眠時間は極端に短くなったが、幼稚園から大学院まで皆勤した体力だけは誰にも負けない自信があった。子育てしながら活躍する研究者になれたら格好良いじゃないか、という邪な自己顕示欲を密かに燃やしながら、子どもたちが生まれる前よりも成果をあげようと心に決めた。子育てはまだまだ続くので答え合わせは暫く先になるが、以前のようなずっと研究室にいる生活でなくとも研究者ライフが充実していることは確かである。第二子が歩き回ってイタズラを始めた頃、JSTの創発研究者に採択された。大きな自信になるとともに、独立した研究者としての自覚を強く求められることになった。周囲の方々に支えられるありがたさをますます実感する今日この頃である。

ここまで、10年余りの研究者人生を振り返ってみると、選択や変化を迫られることでわかったことがある。公私ともに幸福度にかかわるものは、自分らしく生きられること・好きな人間関係の中で過ごすこと・自由であること、あたりだろうか。重要なのは、それぞれには閾値があり、その閾値さえ超えていれば多少増減しても幸福度に影響はないという点と、閾値を下回ると急激に幸福度が下がるという点である。私にとっては、業務内容・研究アプローチには強い拘り（高い閾値）がある一方で、プライベートでの経済自由度の閾値は低く給与水準では幸福度が変わらないようである。また、研究時間が一定の充足度を超えていれば、徒に長く研究室にいても、家族と一緒にいる時間を犠牲にすることは不幸につながることも知った。そして、自分の意志で生き方を決め、頼り頼られる人間関係を大切にすることが幸せには必須であると同時に、日々の努力が不可欠であることも思い知った。

最後に、この執筆依頼を受けたとき、何を伝えればよいのか戸惑ったのが正直な思いだった。多様性をテーマに扱うのは難しく、思い切って完全に個人的な事柄を題材にした。幸せにかかわる観点や基準は人によることは言うまでもない。それでも、「君は君 我は我なり されど仲良き」ということで、お許しいただければ幸いである。

＊Siは、会誌PDF版のSupporting Informationにハイパーリンクされています。

 ©2025 The Society of Polymer Science, Japan